

伊津都葉集六

027
49
2



雨音にやと寝きぬ草花  
庭の花をくくく秋の虫  
矢申く秋手ふりてさるの月  
山岸の土俵とくさる葉に  
津原乃名も古風なりて  
戸口へむけく海都方々に  
木々の打と塔りてさる  
勢く小りさハ語るなりとも  
まごつて燕侯海とてさる

和敬  
素童  
于當  
夙美  
莫圖  
布雪  
乙彦  
士明  
乙鶴

涼一カと聞り踏と直  
凌雲をよこし候をけのめ  
顔田のさきと露なりて  
人々方くたつたハ勢くさる  
亭之返り湯よりさる  
浪女き碁を喰ふま  
大和のさきとけきと物  
本庵とさるさる月を  
親くさるの海つりさる

卮嵐  
北夢  
杜蓼  
蟻州  
几由  
旭嵐  
蘆白  
舍杖  
車夫



三  
 つほくと四國の山乃きり  
 祝ひりきと一應えせの宗  
 瀧水の音も乃きり  
 藪の裡乃かえり手ぬり  
 藪無乃文飲乃泣を  
 青乃お海一上雨を  
 舞犯をやい傷一  
 板乃乃水ぬま遊の  
 柿色の怪子き人

國雄  
 其成  
 蒼胤  
 佛朔  
 宗徳  
 和敬  
 素童  
 于當  
 備美

思々の中しり  
 残菊一  
 うもとの燕の  
 三  
 手乃柳り  
 絹の

莫國  
 布雪  
 乙彦  
 士明  
 乙鶴  
 厄嵐  
 北夢  
 杜蓼  
 蟻州

去程くと梢をえせ、船乃窟  
 澄もゆゆる長陣乃瘦  
 岸の戸にまゝ狂女を退つては  
 汗の蔭毛を新枝しし相  
 今とてとてとてとてとてとてとて  
 一こころとてとてとてとてとてとて  
 椒の去りてとてとてとてとてとて  
 子今迄きゆりてゆい木のけり  
 咲心も一はらうのみの美濃近江

几由  
 旭嵐  
 蘆白  
 舎杖  
 車夫  
 國雄  
 其成  
 蒼亂  
 佛朔

むうい合きとて板竹ののののの  
 去るうとて古江のやの尻尻  
 ねをね抱へてとて眩うゆかぬ  
 澄乃の鐘も小まゝとてとてとて  
 一むとてとてとてとてとてとて  
 花乃とてとて落係乃とて幽ひぬや  
 うきとてり手とりとてとてとてとて  
 海細き浪糸のうとてとてとてとて  
 一きりてとてとてとてとてとてとて

烏頂  
 和敬  
 宗徳  
 于當  
 素童  
 莫圖  
 帛美  
 乙彦  
 布雪



披露きく 徑上一剣 ちゆゆ  
 本るり ぬもき のさささ さな 咲  
 淵のまるとむ せハ母の 祐ふり ぎ  
 檜皮乃 奇と せきりー けり 敷ル  
 目く けし子の 嵐を ゆるす ちゆ  
 おま ぎ乃 摺餅と ころ 屈ん 狭ひる  
 海<sup>ミナ</sup>の 雲の せきりー ちゆ 襟乃 垢  
 木らん ちゆ ちゆ 辰坊乃 小玄 冥  
 人丸の 像子 ちゆ ちゆ 虫の さー

乙鶴 士明 北夢 佛朔 蟻州 杜蓼 旭嵐 儿由 蒼虬

先け ぬん 癒い ち乃 午時  
 雲ささり 沙さ けささ ちゆ ちゆ  
 風け けさ 水ハ せ 先ト ぬ ころ  
 もの ちゆ 乃 奇 鏡子 鏡と つき 並  
 ミ上の 舟乃 帯さ ちゆ ちゆ ちゆ  
 下枝 ちゆ 左 柿の ちゆ ちゆ 地と 摺る ぬ  
 ちゆ 根さ ちゆ ちゆ ちゆ ちゆ 秋の 改  
 山さ ちゆ ちゆ ちゆ ちゆ の 庚 屋乃 破  
 紐さ ちゆ ちゆ ちゆ ちゆ ちゆ ちゆ

厄嵐 舎杖 車夫 國雄 其成 宗徳 于當 素童 味敬

肩癖の如くく起る事も理  
 采衣のくく乃海老のくなり  
 毛くくくくナ肥後沼のくく  
 方くく毛くくくナ點聖材もく  
 括くく花へ降りくむくく及古  
 中く後くくもわかきナ家ヤク  
 齒厚くくも岩根の神くくく  
 手くたぐくくくナ箇のくくく矢  
 心くくくくくナ心くく水りくくナのくく

備美  
 蘆白  
 布雲  
 莫圖  
 士明  
 乙彦  
 乙嵐  
 乙鶴  
 杜蓼

毛めん重くく水と細免さナ巨市梨  
 鶴のとヤナ若くく海くくも知有く  
 洗足くくんくくナ教志渡寺  
 怪亦有くくくナおナ梅ナ梅ナ引  
 帝弁のくくくナ月とくくくナ育  
 露ナ衣ナかナいナくナ投ナ烏帽子具  
 足くく海くくくナ坪のくくくナ  
 糸ナくくくナつナ欠ナハナまナくナへナ大ナセナリナ上  
 佛の本地ナくくナ痛ナくくナヤナくナもナ江

北夢  
 几由  
 蟻州  
 蘆白  
 旭嵐  
 車夫  
 舍杖  
 佛朔  
 國雄





水素危もメ印の勢よ青田植  
 雨傍正も何先ト飽也  
 山の中物のと夢にやはる  
 平群へ遊とわ袖を扱く  
 培風をよ入訓林の中と  
 いよとり上戸あちん  
 子の長あひまを毒の  
 茂るを端しきゆる目を  
 毛都羅綿塊りきよさるへ

全 葛 輅 葛 輅 葛 輅 葛 輅

才のうろ箱呼し  
 姫言を棺乃オト思せせ  
 樽のうろ勢に移せし  
 孝むの屍も癒癒を  
 うた歌目り年の水り  
 泥の火をうろりる小位  
 雨をりるれ逆すけ  
 記をすて土間と大泥起  
 母石のまののさ

輅 葛 輅 葛 輅 葛 輅 葛 輅

月うけと涼くよら様田丸  
 佐渡と口とく把渡の響響響  
 谷々谷々々々こい毎日碌めとろ  
 床あーい川もへたもろ病近し  
 竹も少巻も本の草奥く共  
 二年のくく控く白きを乃其  
 ねまをくく乃酒酸のくく

又

葡萄酒 葡萄酒 葡萄酒 葡萄酒 葡萄酒

及ろまをくくくくぬ木乃下流  
 荒の子のそと披ーくくくく  
 控勢ぬ市の小帳をくく月をくく  
 知れき釜ー恐ろくと高の歌  
 とーの流榜のききと引流り  
 枕のく勢乃き沙汰有り有り  
 たほくの商人く坊の業うけ  
 味骨尾き方々々々淫動くくく  
 うき世の本曾のうけくくく

葡萄酒 葡萄酒 葡萄酒 葡萄酒 葡萄酒

杖うせうきくし布抱片し乃種  
 芋の糸めく袖をくし月夜  
 一羽を流り一玉の床何と  
 細た〜い打とにおく風軟の作  
 分々の苦患致より返をむ  
 絨ひ月の影を笑産のちん厚め  
 耳をいこ〜うの成るむもと  
 舟う程を即非和也と送る片り  
 うり糸の泡のはつ〜ときゅ

夢 菊 夢 菊 夢 菊 夢 菊

右一羽を流りきくし入門の手を〜花のけつこ  
 を力〜きくし移んよりいとさつ片侍り

东山三

影影せ戸を吹く水はか袖のり  
 むまこの羽根の生へ持つ何舞  
 葉稗のちこり乃中と月澄と  
 乾乃火膚のさ〜し 枕つく  
 礼うけと精保へ通し小いさけん  
 むくと起るを雲り〜とえ疾  
 是代〜し〜し 樞乃立〜して

一路 蒼虬 佛朔 路 朔 虬 路



還夷の存よまな 信止る  
 塗箱の紐をきつきはてやうふ  
 たきものほこほのきき  
 抱りせりりあおねほよふ  
 らふしいふふと 祝文の草豆袋  
 らふふと 陸麩の持る月えさ  
 妻梅たよりめ けき新す  
 荷つきよ田まこけらるる渡り  
 うんけん保り たりる山う

靴 靴 靴 靴 靴 靴 靴

人我 ころりもえへそく垣のむ  
 海をねふと 火焼耐のかき  
 破鏡とやとよあむ江の上ま  
 茶子の塚より おく葦もたし  
 靴うのくをきくを引廻  
 友のあつりり 山のむとり犬  
 兼好の手張の文庫うとび  
 こそち 一と ころりときき  
 靴のせいらくまも味あひく自い也

靴 靴 靴 靴 靴 靴 靴

籠のつき坊を捜すも  
 之免よりゆつりしきつ領  
 式は乃りも的さけし山  
 栗鼠の正も標や槍子母もりと  
 とりの肴々石橋なりしや  
 咳<sup>ナウ</sup>の襖のうらま<sup>ナウ</sup>く  
 戸根乃出水をむれりく  
 大<sup>ナウ</sup>こ<sup>ナウ</sup>を<sup>ナウ</sup>を<sup>ナウ</sup>へ<sup>ナウ</sup>に<sup>ナウ</sup>け<sup>ナウ</sup>に<sup>ナウ</sup>  
 旭まゆゆくは乃るも思

乳 朔 路 朔 乳 朔 乳 朔 乳

伎り勢ぬ命味をうむ子蔵  
 極の美しはうみ海の中

兔路四

透<sup>ナウ</sup>や木免<sup>ナウ</sup>ま<sup>ナウ</sup>と<sup>ナウ</sup>峰<sup>ナウ</sup>の<sup>ナウ</sup>星<sup>ナウ</sup>  
 う水もつ<sup>ナウ</sup>は<sup>ナウ</sup>岸<sup>ナウ</sup>戸<sup>ナウ</sup>の<sup>ナウ</sup>心<sup>ナウ</sup>透<sup>ナウ</sup>水<sup>ナウ</sup>  
 煉<sup>ナウ</sup>き<sup>ナウ</sup>き<sup>ナウ</sup>を<sup>ナウ</sup>を<sup>ナウ</sup>伏<sup>ナウ</sup>中<sup>ナウ</sup>の<sup>ナウ</sup>好<sup>ナウ</sup>満<sup>ナウ</sup>水<sup>ナウ</sup>  
 虫<sup>ナウ</sup>も<sup>ナウ</sup>も<sup>ナウ</sup>も<sup>ナウ</sup>の<sup>ナウ</sup>襪<sup>ナウ</sup>水<sup>ナウ</sup>  
 三月<sup>ナウ</sup>の<sup>ナウ</sup>み<sup>ナウ</sup>を<sup>ナウ</sup>月<sup>ナウ</sup>の<sup>ナウ</sup>似<sup>ナウ</sup>く<sup>ナウ</sup>病<sup>ナウ</sup>の<sup>ナウ</sup>子<sup>ナウ</sup>  
 半<sup>ナウ</sup>も<sup>ナウ</sup>た<sup>ナウ</sup>く<sup>ナウ</sup>ま<sup>ナウ</sup>の<sup>ナウ</sup>塚<sup>ナウ</sup>

学<sup>ナウ</sup>多<sup>ナウ</sup>  
 併<sup>ナウ</sup>於<sup>ナウ</sup>  
 一<sup>ナウ</sup>洛<sup>ナウ</sup>  
 廿<sup>ナウ</sup>南<sup>ナウ</sup>  
 於<sup>ナウ</sup>  
 置<sup>ナウ</sup>

乳 朔

梅行も傳の筈をくたて  
阿久屋の祖より風居ぬ  
としやりし大きな舟の名も方て  
古き藤丸とたんき唐菰  
かろくとそのぬきとく情  
うき茶とやまたとし色  
言々々々海方々々まき々々こ上々  
木の〜〜梅舟をほく〜  
海手よく志せり ね阿の務嬉ハ

南 莖 菊 海 菰 苧 南

う〜とと櫛り落く〜ほ〜  
坐して火とどとんきんきん  
なん〜皮屋の細工〜ぬく

海 莖 菊

以上連句畢

即事

長安

秋も先月より霧や水の水のうん  
多あ籠て空おく水より音の舟  
葛垣やうきよのそけい人の〜

宇流 一話  
袋茶 二  
袋茶 二



可くもつ子一是ゆくや西はこけ  
 船くややむのこけりのきく  
 葦のむとつ動くやまの月の露  
 林うたかや喉のきくやまの塚のき  
 山うたかや松のきくやまの霧のき  
 林風のきくやまの霧のき  
 枇杷の木ともろくやまの月の風  
 鶴のきくやまの月の風  
 方くも根や尻のつき

蒼乳  
 仙草  
 布雲  
 一方楓  
 乙秀  
 三成  
 若雅  
 故道  
 岱李

ゆく人もええははきくしゆか  
 夕く松や海の上の松のき  
 松の幹のきくも霧のきく水  
 何うも松のきくも霧のきく水  
 松つきのきくも霧のきく水  
 戻りくも霧のきくも霧のきく水  
 石のきくも霧のきくも霧のきく水  
 流のきくも霧のきくも霧のきく水  
 ものきくも霧のきくも霧のきく水

杜梨  
 鶴栖  
 素香  
 蕉里  
 京女  
 白鷺  
 金葉  
 干物  
 梅價

彩雲をみちあきまつ水は川舟の瘦  
 としりしや河の峰をわたり渡る舟  
 小舟ありや露をまらりと曲力に  
 秋のくさくさなりむく方よりさき松  
 瓜つきくさくさを小粒は河きの風  
 流水のなき口あり ありあり  
 山のきくく流る水はまづもくも  
 吹くもくく流るりらん山くく  
 流嶽の雪と木の宿や夕の霧

十丈 芦白 方南 彩之 九花 儿乙 鹿川 富仙 夙也

さしあきく流るるのまらりとめくも  
 流るりやうらな流る水は月夜  
 舟をくさく小舟ありはくもくも  
 葉のまらりと流るる出たりたり  
 ころもくもく秋の折くくくくく  
 舟門にまらりとくくもくもくも  
 舟草や小舟の流るる乃河きのく  
 雲をさへとありと出るや鹿の犬

愚黙 文雕 長成 自嘆 春亭 倅美 廿南 佛朝

以上

不気集六終

常坐佛形存師能俳諧を評して曰五大と密  
法を以て一密法及て風月不足とて一  
宗の邪袪して一も不履也とて一の  
瑞雲阿も一唱魔魁を降伏一ある之  
の如くも一此柴乃戸ひきたてて  
二ありふかきも一季觀を以て一魔を  
以て細みだたり一花も一是も喚茶一握の  
一もを以て一月下能遠不諸白為十蓋花



醉態をあらはし是は佛の俳諧乃風体なりて  
こころしく見佛一閑法なりしをうや余佛く了  
たふすべしとあるに權實と毎酒ふあ刺心

甲申仲秋

信陽除史世南跋



二條家  
御能諧書林  
寺町陽池六町  
兼舎度身信  
壽梓

